

## 大学移転が受験動向に与える影響

—東京教育大学から筑波大学への「移転」を事例として—

大谷奨, 本多正尚, 島田康行, 白川友紀 (筑波大学アドミッションセンター)

大学にとって設置場所の移転は大きなイベントである。1970年代はキャンパスの整備や統合という側面から大学移転がすすめられたが、その際移転に伴う志願者や入学者層の変化にも少なくない関心が払われてきた。では実際に移転によってどのような変化が生じたのか(または生じなかったのか)。本稿は東京教育大学の入学者と筑波大学の入学者をその属性(出身県, 高校)から比較した。移転によって明らかに首都圏からの入学者は減少し、また出身高校も多様化した。それらは志願者数や入学難易度の変化にはあまり影響しなかったことが認められる。

### 1 はじめに

#### 1.1 移転とその影響

1970年代、我が国では国家的な観点からは都市部への機能集中を避けるため大学の地方分散が企図され、また大学側としては都市部の手狭で分散したキャンパスを統合することによる教育研究上のメリットを求めて大学の郊外や地方への移転が進められた。

候補地の確保に苦労したり、開発前に厳しい環境アセスメントを受けたりするなど、移転には様々な困難が伴ったことが伝えられているが、それ以前にそもそも用地の確保ができなかったり、キャンパスの移動に伴う志願者層の変化を憂慮して移転を断念した大学もあった。とりわけ後者の志願者の問題、露骨に言えば、移転に伴い志願者のレベルが低下するのではないかという心配は、移転を決断する上で大きな懸念材料である。

本論文で検討する筑波大学はそれまで都内中心部にあった東京教育大学を閉じ、それを引き継ぎつつ開学するというやや異例な形ではあったものの、都心から首都圏北部への移転を経験した大学の一つと考えることができる。比較的規模の大きな国立大学が、県を越えて移転した事例はきわめてまれであろう。

また筑波大学は近年、鉄道新線が開通し都心とのアクセスが飛躍的に向上したが、これによっても志願者の動向に変化があったことが伝えられている\*。郊外への移転、新たな通学手段の獲得、さらには学部改組、入試制度の変更といった志願者の動向に変化を及ぼすようなイベントとその影響(の有無)についてはもう少し注意が払われてもよいであろう。本論文では出身県や出身高校に注目して、東京教育大学から筑波大学への移転に伴う受験動向の内実について検討を試みたい。

#### 1.2 東京教育大学の閉学と筑波大学の開学

東京教育大学は戦後、旧制の東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校を母体として、文学部、教育学部、理学部、農学部、体育学部を擁する総合大学として発足した。一方の筑波大学は、1973年春に設置が閣議決定され、同年秋の国立学校設置法改正により開設されることになった。正確に言えば、東京教育大学の閉学と筑波大学の開学はそれぞれ独立した措置であるが、施設やスタッフの多くを継承していることから本稿では大学移転の一つとしてとらえることにする。この移転は段階的に

実施され、1974年に教育大文学部、理学部および体育学部の募集が停止されると同時に筑波大学第一学群（人文学類、社会学類、自然科学類）、体育専門学群および医学専門学群が発足し、翌75年、残る教育学部と農学部の募集停止に合わせ第二学群（比較文化学類、人間学類、生物学類、農林学類）と芸術専門学群が発足している。本稿の関心は教育大から筑波大への移行の問題にあるため、今回の筑波大入学者の考察は、新設の医学専門学群については除外して進める。

## 2 移転前の予想

まず、教育大から筑波大への移転に際し、受験者の動向がどのように予想されていたのかを確認しておきたい。開学が決まった

1973年の秋、読売新聞は「『一期校』とはなっているものの実際のランク付けは、どうなのか」と筑波大の難易度について取り上げている（1973年11月22日朝刊）。当時の『螢雪時代』によると東京教育大学の難易度は、文学部が東北大、九州大といった旧地方帝大と同レベル、理学部は旧制高校を母体とする理学部とともに、旧帝大の次に位置している（1973年8月増刊号）。

これが筑波への移転によってどうなるか。上の読売新聞は予備校関係者の話として「受験生には“地方大学”のイメージを与えるので…そうべらぼうに高くなるとは思えない」、 「レベルが落ちるとは思えないが教育大を目ざしていた受験生がストレートに行くとは限らない…“通えない筑波大”はハンデになることは確かだ」といった声を掲載している。少なくとも当時、移転によって難易度が上がるということは考えられていなかった。その背景には「東京からはずれる」ことによる人気の低下が想定されていた。

さらにはっきりと難易度が下がると占う週刊誌もあった。週刊文春1974年1月14日号の記事「あてはずれ官製筑波大学第一期受

験生のレベル」は、「まあ、地方の駅弁大学に毛のはえたようなもの」という評価を紹介しながら、難易度についても「①『東大、一橋、東工大グループ』、②『東教大、都立大、千葉大』と従来あったものが、筑波大では第二グループの首位から落ちて、都立大のつぎあたり」になるだろう、という予測を立てている。

『螢雪時代』も「東京教育大がそのままスライドしたことにならないところに分析のむずかしさがある」と予想の立てにくさを前置きしながらも、「難易度は従来の東京教育大よりかなりやさしく、競争率も、三倍台、三・五倍を中心に前後しよう」と判断している（1974年2月号）。

このように当時の論評はおおむね易化を予想するものであった。その最大の根拠は、東京から離れることで、「地方大学というイメージ」が強くなることにあった。上の週刊文春は在京私立大学が計画していた埼玉県への移転が「応募者が少なくなるのと、学生の質が低下するというので、中止になった」という話を紹介している。同記事は、実際に神奈川県立のある高校では、「筑波大を志望する者は例年の教育大志願者の四分の一に減少している」ことを伝えているが、このような志望者の減少が難易度のダウンにつながると判断している。

ただ、これらはほとんど首都圏の受験生の動向に着目した予想であることには注意しておきたい。先の読売新聞は「自宅から通って国立大に行きたい」という「願望は根強いものがある」と述べているが、たとえ数多くの大学が揃っている東京の受験生が筑波移転を地方大学化として捉えたとしても、いずれにしても入学するためには自宅から離れなければならない地方出身者がそれと同じように受け止めたとは考えにくい。

実際の県別や高校別の動向を確認しながら移転前後の変化の有無について検討してみよ

う。

### 3 実際の変動の有無

#### 3.1 県別の変化

表1は教育大学が全ての学部で募集を行った最後の2年間（1972，1973年：募集定員1030名），および筑波大学が第二学群まで募集を開始した最初の2年間（1975，1976年：総定員1110名）の都道府県別入学者数である（1974年については両大学で部分的に学生募集している移行途上にあるため除外した）。上位15県までをピックアップしたが、だいたいこの順位だと例年合格者は20名程度となる。

この表から教育大時代には、東京出身者は入学生の4分の1以上を占めていたことがわかる。これに神奈川県および埼玉県といった近郊地域を加えると占有率は40%以上となる。東京教育大は首都圏から多くの学生を集める通学者の多い大学であったと考えることができる。

筑波開学2～3年目になるとこの様相は大きく変化している。1位は維持し続けるものの東京からの入学者はほぼ半減し、同じく減

少しした神奈川に変わって茨城が2位となっている。埼玉県からの入学者も少なくなっており、筑波大学の移転は南関東や地元茨城の入学者に大きな変動をもたらしたといえる。

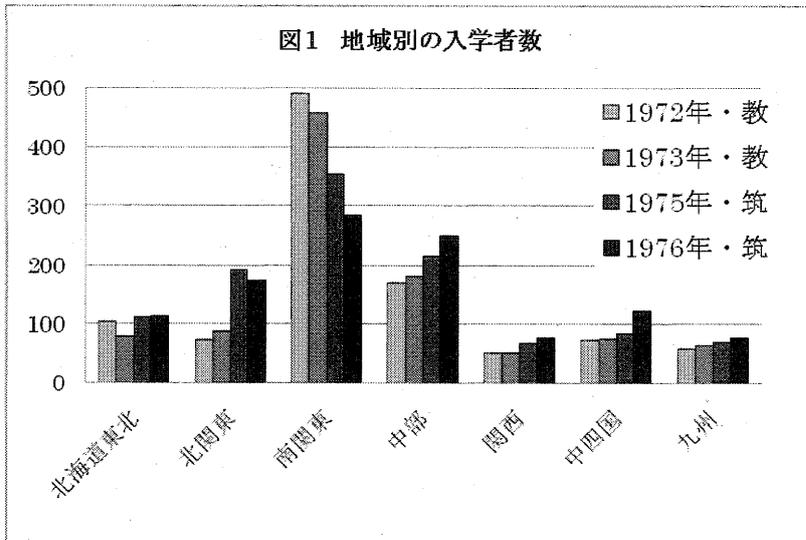
その一方、栃木、群馬といった北関東や長野、静岡など関東周辺県からの入学者は移転前後で大きな変動は見られない。さらに遠く、愛知などからも移転に関わらず毎年20名以上の入学者があった。

またもともと首都圏以外からの入学者も決して少なくはなかったが、筑波移転後は福岡、広島といった西日本からの入学者も目立つように思われる。

そこで、地域別の入学者の変化を見てみよう。図1は関東をさらに北（茨城、栃木、群馬）と南（千葉、埼玉、東京、神奈川）に分け、ブロック別に各年の入学者数を示したものである。東京を中心とする南関東のシェアが急速に低くなっていったことは明らかであろう。しかしその減少を新たな設置場所である茨城県を含む北関東がすべて吸収したわけではなく、中部地方より西側のブロックからの入学者の増加がそれを補う形となっている。つまり、筑波大学の場合、移転によって

表1 都道府県別入学者数(上位15県)

1972年・教		1973年・教		1975年・筑		1976年・筑	
1	東京 294	1	東京 269	1	東京 205	1	東京 149
2	神奈川 103	2	神奈川 91	2	茨城 121	2	茨城 107
3	埼玉 67	3	埼玉 59	3	神奈川 69	3	静岡 63
4	長野 40	4	長野 50	4	長野 58	4	神奈川 62
5	静岡 39	5	千葉 38	5	静岡 53	5	埼玉 49
6	栃木 30	6	栃木 31	6	栃木 46	6	長野 39
7	千葉 27	7	茨城 29	7	埼玉 41	7	栃木 35
8	北海道 24	7	群馬 29	8	千葉 39	8	富山 27
		9	静岡 28	9	富山 30	9	群馬 26
11	茨城 20	10	愛知 27	10	福岡 24	10	兵庫 25
		11	新潟 23	10	群馬 23	11	愛知 24
12	山形 19	12	大阪 22	12	北海道 21	12	千葉 23
		12	鹿児島 17	13	愛知 20	13	福島 21
15	新潟 18	14	山形 17	14	山形 20	14	香川 20
				14	山梨 20	15	新潟 20
						15	広島



東京をはじめとする首都圏からの入学生は減り、その分地方からの進学者が増えたことで、以前より全国的に学生を集めるようになった、といえそうである。

### 3.2 高校別の変化

では、高校別にみるとどうであろうか。表2はその年に5名以上の入学者を出した高校数とその数を所在県別に整理したものである。先に教育大時代には東京、神奈川、埼玉出身の入学者が多かったと述べたが、同時に大量の入学者を輩出する高校もまたこの3県に集中していたことがわかる。筑波への移転後は茨城県内の高校が多くの入学者を輩出するようになる。また首都圏で多くの入学者を出す高校が激減する一方で、山梨、静岡、富山といった中部から多くの合格者を送り込む高校が増えている。高校別に見ても移転によって首都圏以外からの入学者が増えたことが理解されるのである。

ところでこの表は、5名以上合格者を送り込む高校が、教育大時代には50数校あったが、筑波開学3年目（1976年）には30校あまりにまで減じたことも示している。では残りの定員はどこが埋めたのであろうか。

このことは逆に少数の入学者しか出してい

ない高校の変化を見ることで理解できる。教育大ではその高校から1名しか来ない学校は200程度であったが、筑波移転後、その数は300校を超えている。入学者の多い順に高校を並べると、移転によりロングテール化が進んだことになる。入学者の出身高校はより多様になったといっ

よい。

移転によって入学者の出身県が首都圏から地方へと分散していったと同時に、特定の高校から数多く入学するという傾向も薄れ、出身高校も多様化していった。

### 3.3 「難易度」の変化

先に見たようにマスコミはおおむね、東京を中心として自宅通学を志向する者が筑波大を敬遠するために志願者が減り、それに伴い難易度も教育大より下がるであろうと予想していたが、実際の受験生の動向はどうだったのであろうか。既述のように旺文社は3倍台の競争率を予想していた。しかし実際にはそれを上回り、初年度の競争倍率は各学群とも4倍から6倍であった。

前掲の週刊文春も開学前は不人気を予想しつつ、当時名門として知られていた都立高校の進路指導担当教員から「志望学生はいないことはないんです。しかしほとんどきかないですねえ。発足したばかりで内容もよくわからないし、まあ“地方大学”というイメージが強い」という発言を引き出していたが、同じ高校の教諭はこの初回の入試について、「この競争倍率は国立1期校としては、まずまずの数字であり「都会地から遠いことを考えれば意外といっいい人気の高さであ

表2 5人以上入学者を輩出している学校数と都道府県別内訳

1972年・教				1973年・教				1975年・筑				1976年・筑			
人数	校数	県	内訳												
15名以上	3	埼玉	1	15名以上	2	東京	1	15名以上	2	茨城	2	15名以上	2	茨城	2
		東京	1			神奈川	1			茨城	1			茨城	1
		神奈川	1			東京	7			埼玉	1			東京	1
10名以上	7	東京	5	10名以上	12	埼玉	2	10名以上	3	東京	12	10名以上	4	静岡	1
		神奈川	2			茨城	1			神奈川	6			富山	1
		東京	17			長野	1			茨城	3			神奈川	4
5名以上	46	埼玉	5	5名以上	42	鹿児島	1	5名以上	43	静岡	3	5名以上	31	長野	4
		神奈川	4			東京	15			富山	3			茨城	3
		長野	4			神奈川	6			栃木	3			埼玉	3
		静岡	3			千葉	3			群馬	2			東京	3
		群馬	2			長野	3			埼玉	2			静岡	3
		千葉	2			香川	2			埼玉	2			栃木	2
		山形	1			秋田	1			長野	2			山梨	2
		福島	1			山形	1			香川	2			富山	2
		茨城	1			福島	1			北海道	1			青森	1
		栃木	1			茨城	1			秋田	1			山形	1
		富山	1			栃木	1			福島	1			岐阜	1
		岐阜	1			埼玉	1			千葉	1			香川	1
		鳥取	1			新潟	1			山梨	1			鹿児島	1
		香川	1			富山	1			鹿児島	1				
		鹿児島	1			静岡	1								
						福井	1								
		愛知	1												
		岐阜	1												
		鳥取	1												

る」, 「前途未知数の大学にしては相当の激戦だったといえよう」と評している(『螢雪時代』1974年8月増刊号)。大方の予想に反し, 志願者はかなり集まったことになる。

ただ志願者が減らなかったとしても, 先に見たように, 移転に伴い首都圏の高校からの入学者が減り, また特定の高校ではなく全国の様々な高校から入学者が集まるようになっており, 入学者の学力的な特性が変わっていることも考えられる。志願者減を前提としていたものの, 実際, 前評判でも難易度は教育大より下がるとされていた。

しかし予備校関係者は2回目の入試の直前, 「一年目はある程度の志願者を集めたが欠席率も高く, 東京教育大にくらべてレベルもややダウンし」としながらも, 「その構想と内容も浸透しつつあり, しだいにむずかしくなろう」と予想を微妙に変えている(同1975年2月号)。また先の都立高校教員も

「今後は順調に志願者を集め合格難易度も高まるものと考えられる」と述べていた。

志願者自体は, その後も「筑波大は第2学群(比文), 第1学群(人文)とも増加し, ジワジワ人気が高くなってきた」(同1976年2月号), 「定着しつつある筑波大(社会学類)などの増加が目立つ」(同1977年2月)といったように伝えられており, 競争率は高めで安定していった。

難易については, 当時筑波大は推薦入試に定員を2~3割を充て, また一般入試も全教科型の1次試験の後, 学類ごとに主要3教科で2次試験を行っていたため, 他大学と単純な比較はできないが, 『螢雪時代』の難易度表を見る限り大きな上下変動は見られない。

例えば旺文社が示す「難易ランキング」を比較しても, 東京教育大文学部を阪大, 東北大, 九大, 神戸大の文学部と同ランクに位置づけていたが, 1977年8月現在のランキン

グでは文学部の系譜を引く人文学類は名古屋大学、東北大学、神戸大学などの文学部と並んでいる。理学部は旧帝大、東工大の次のグループに静岡大学、埼玉大学、金沢大学などともに属していたが、その後身の自然学類もほぼ同様に位置付いている。

移転前に推測されていた難易度の低下はさほど目立つものではなく、また経年で受験生のレベルは上昇していったようである。例えば、比較文化学類が開設される前年（1974年度）の旺文社模試での志望者平均偏差値は58.0であったが、3年後の1977年度には59.9まで漸増している。

#### 4 小結

筑波大学の場合当初の予想通り、東京からの移転により自宅通学が可能な首都圏からの入学者は減少した。しかしそれと入れ替わりに他地域からの入学者が増えたことで、志願者は減少することなく、難易度もほぼ維持された。これは受験雑誌や週刊誌の予想と異なる点である。むしろ移転後は全国型としての性格をより強くしたとあってよい。この現象にはどのような説明が可能であろうか。

長野、静岡といった関東周辺部からの入学者は東京教育大から筑波に移っても一定の割合を占めていた。このことから、かつての地方からの進学者の中には、東京にあるからという理由で教育大を志望したわけではない入学者層が存在していたことを示唆している。

「マジメで貧乏、その上ヤボというのが教大生のトレード・マーク」という自己認識からは教育大のスクールカラーはどちらかといえば華やかな都会的ライフスタイルとは対極にあったことが理解される（『教育大学新聞』525号、1970年2月）。

一方教育大は伝統的に中等教員養成を担ってきたが、その役割は設置場所によって急変するものではない。都会生活には特に魅力を感じず、むしろ教育大学が保持してきた機能

を求めて進学を目指す受験生が少なくなかったとすれば、その層が移転後も筑波を志望し続ける可能性は比較的高いと考えられる。

また予備的に検討した限り、東京教育大の学部間では入学者出身県にばらつきがあった。例えば理学部には首都圏出身者が多く、体育学部は全国から進学者を集めるという傾向である。筑波移転時の受験者層の変化は、体育学部の傾向が全学的に広まった結果といえるかもしれない（あるいは体育学部が筑波に移転してから分散の傾向がより強くなった結果と考えることもができる）。この確認のためには学部ごと、学群学類ごとの出身県、出身高校を調査する必要がある。

さらに東京都からの進学者の減少と都立高校の学校群制度の導入（1967年～）との関係、出身高校の多様化と推薦入試の導入、志願者と受験科目数の関係など、移転に伴う受験者層の変化を検討するためにはなお考慮に入れなければならない要素が多数ある。数的な確認だけではなく、創生期の筑波大学に進学したかつての受験生にその動機についてインタビューすることなども重要であろう。

今回取り上げた「移転」以外にも、大学の歴史が長くなればそれだけ自らに大きな影響を及ぼすようなイベントの発生は自発的であれ外発的であれ不可避である。まずは従来のイベントが受験者の動向にどのような影響を与えたのかを確認しておくことが重要だといえよう。またそのような転機はそれに伴う受験者層の変化によって、その大学のポジションや機能を再確認する機会でもある。これもまた効果的な学生募集を行う上で基本的な情報といえる。

\*本多正尚ほか「交通機関の開通等が受験動向に与える影響」（『平成24年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会研究発表予稿集』157-162頁）が新線開通と筑波大学受験者の動向の変化について報告している。